

教員養成における実践的指導力育成の一方策 ～小学生の体験活動を企画立案する取組～

獅子目 博文

はじめに

本稿では、科目「地域貢献活動」⁽¹⁾の1テーマとして2011年度から取り組んでいる「地域教育活動」の実践事例を紹介しながら、その成果と課題を明らかにする。

「地域教育活動」は、教職を目指す学生に小学生の夏休みの体験活動を企画立案させ、実際の活動にも参加させることで、子どもへの理解を深めさせ、併せてマネジメント能力やコミュニケーション能力等を高めさせるとともに、学校・家庭・地域の役割と連携・協力体制の在り方についても認識を深めさせながら、実践的指導力⁽²⁾の育成を図ろうとするものである。また、保護者をはじめとする地域住民と協力しながら、小学生に自然体験や社会体験等の豊かな体験を提供することで、地域の教育力の向上にも貢献しようとするものである。

なお、本稿は「九州教育経営学会第92回定例研究会」(2015.6.27 九州大学)における発表に、2015年度の実績を加えて改めて精査したものである。

1 取組の背景と経緯

(1) 取組の背景

① 地域の教育的役割の重要性

2012(平成24)年、中央教育審議会(以下「中教審」と称す)答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」は、大学における教員養成の「当面の改善方策」として、「修士レベルの教員養成・体制の充実と改善」を行うとともに、「学部における教員養成の充実」のため、「教員養成カリキュラムの改善」と「全学的な体制の整備」を図る取組を提唱した。本学も答申に先立って2010年度に、それまでの全学教職課程委員会を発展的

に解消して「教員養成センター」⁽³⁾を設置した。取組の一つとして、本学と市教育委員会及び管内の公立幼稚園、小・中学校との間に「地域連携教育プロジェクト」⁽⁴⁾を構築し、「学校インターンシップ」⁽⁵⁾や「教職フィールドワーク」⁽⁶⁾等の学校体験活動を実施している。本学で育む豊かな教養と各学科で培う高い専門性を、学校現場で生きて働く実践的指導力として統合し教職生活全体を通じて学び続け、成長し続ける教員としての基盤をつくろうとするものである。

一方、筆者は公立高等学校や教育行政に携わってきた経験から、教育が学校だけで行われるものではないことを承知している。また、鹿児島県社会教育委員としての立場からも、学校や教員が地域社会に対して、十分に開かれたものとなるよう願ってきた。折しも国は、2006（平成 18）年改正の「教育基本法」に、第 10 条「家庭教育」とともに第 13 条「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」を新設した。それを受けて 2008（平成 20）年には「学校支援地域本部事業」⁽⁷⁾がスタートし、各学校で地域の人材が学校応援団として多彩なボランティア活動を行っている。2013（平成 25）年、文部科学省は「第 2 期教育振興基本計画」において、公立小・中学校の 1 割をコミュニティ・スクールにとの推進目標を掲げ、学校教育への地域の関わりを重視した。また、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」（閣議決定 H26.12.27）は、「地方への新しい人の流れをつくる」ために「学校を核として、学校と地域が連携・協働した取組や地域資源を生かした教育活動を進めることにより、全ての小・中学校区に学校と地域が連携・協働する体制を構築するとともに、地域を担う人材の育成につながるキャリア教育や地域に誇りを持つ教育を推進する」とした。中教審は、「教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）」（H27.8.26）、さらに「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ（報告）」（H28.8.26）において、改訂の基本的な方向性の一つに「社会に開かれた教育課程」を掲げた。一方、2015（平成 27）年 12 月 21 日には 3 本の答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」「これからの学校教育を担う教員の資質能力向上について～学び合い、高め合う教員育

成コミュニティの構築に向けて～」を出したが、いずれも、これからの時代に必要な資質・能力を子どもたちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を求めている。学校教育を学校内に閉じるのではなく、その目指すところを、教育課程を介して社会と共有・連携しながら実現させなければならない。

2016（平成 28）年 1 月、馳文部科学大臣は「次世代の学校・地域創生プラン～学校と地域の一体改革による地域創生～」(馳プラン)において、「文部科学省は、一億総活躍社会の実現と地方創生の推進には、学校と地域が相互にかかわり合い、学校を核として地域社会が活性化していくことが必要不可欠であるとの考えの下、上記三答申の内容を実現するため、学校・地域それぞれの視点に立ち、『次世代の学校・地域』両者一体となった体系的な取組を進めていく」と述べた上で、「社会に開かれた教育課程」の実現や「地域とともにある学校」への転換、そして「学校を核としたまちづくり、学び合いを通じた社会的包摂という方向を目指して取り組みを進める」とした。

鹿児島県は、毎年 11 月の第一週を「地域が育む『かごしまの教育』県民週間」⁽⁸⁾に定めるなど、地域に開かれた学校づくりに努めているが、今後はさらに踏み込んだ「地域とともにある学校づくり」が求められる。そうであれば、教員には地域社会とかわかる力が必要とされる。例えば、地域で活躍する子どもたちの成果を評価する場を、学校教育の場に設定していくこと等が大切であり、学校ボランティアをはじめ地域の人々が学校に入っていく一方で、教員が地域に入っていくなど、双方向の往還が求められる。

大学の教員養成課程において、地域の教育的役割の重要性について認識を深めさせながら、学校と地域の連携・協働に参加できる力を育成することは意義あるものとする。

② 体験活動の必要性

中教審第一次答申「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について」⁽⁹⁾(H8.7.19)は、「生きる力」を育むため、子どもたちに家庭や地域社会での体験活動の機会の拡充が切に望まれるとした。2002（平成 14）年、文科省は都道府県教育委員会あてに「学校週 5 日制の実施について」(通知)⁽¹⁰⁾を出し、

完全学校週5日制を「ゆとりの中で、学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、子どもたちに社会体験や自然体験などの様々な活動を経験させ」、「生きる力を育むものである」として、趣旨の実現を求めた。2007（平成19）年に改正された「学校教育法」は、第31条「体験活動」において「社会奉仕体験活動、自然体験活動その他の体験活動の充実に努めるものとする」とし、2008（平成20）年改訂「学習指導要領」の主な改善事項の一つに「体験活動の充実」が掲げられた。「小学校学習指導要領解説 特別活動編」第2章第2節「1 人間形成と特別活動」では、複雑で変化の激しい社会において生きる力を育成することが求められるとしたうえで、「学校における望ましい集団活動や体験的な活動を通して、児童の人間形成を図ることを特質とする特別活動は、大きな役割を担うものである」と記述する。同様に「中学校学習指導要領解説」は、「このような複雑で変化の激しい社会での生き方などについて体験的に学ぶ場が必要である。特別活動は、その重要な場や機会として、学校の教育において、望ましい集団活動や体験的な活動を通して、実際の社会で生きて働く社会性を身に付けるなど、生徒の人間形成を図る教育活動である」としている。そうであれば、教員には、そのような特別活動を実践できる力量が求められる。

中教審答申「今後の青少年の体験活動について」（H25.1.21）は、体験活動の内容を具体的に示し、社会を生き抜く力の養成等の意義・効果を掲げながら、体験活動の推進方策について提言を行った。「学校教育と社会教育が協働して体験活動の充実を図る必要がある」として、大学においても「質の高い学士課程教育を進める」ため、インターンシップや社会体験活動といった「教室外学習プログラム」の提供が必要であると指摘した。さらに教員が体験活動に関する指導力を修得できるよう、養成段階や現職段階において指導力向上につながる機会を積極的に設ける必要があるとした。特に「教員養成での取組」（16頁）では、「子どもたちが体験活動を行う際に、学生が自ら企画を行ったり、引率したりするボランティア等として参加できる機会を取り入れることで、子どもの成長を実感したり、予期せぬ子どもの行動を予見し対応したりするといった教員に必要な能力を身につけることができる」としている。

鹿児島県においても、「体験活動の推進方策と青少年社会教育施設のあり方～心豊かでたくましい子どもを育てるために～」(「鹿児島県社会教育委員の会議」審議のまとめ H24.3)は、「学校における体験活動の推進方策」(5頁)のなかで「学校外の体験活動に参加した児童生徒を学校の教育活動に生かそう」と提言し、その具体例に「学校外活動の情報収集、実態把握」や「学校外活動の把握と学校教育への活用」を掲げるほか、「教職員がPTAや子供会等の地域行事に参加し、子どもたちの体験活動を支援しよう」とした。

教職を目指す学生が子どもたちと関わる活動は全国的に行われているが、その多くは教育委員会や各学校の要請に応じたボランティアとしての学習支援活動である。鹿児島県では、鹿児島大学が2004年度から「いちき青松塾(現在はいちき串木野市青松塾)」と呼称して、市内の小3～中3を対象に、第3土曜日を除く毎週土曜日に子どもたちの学習活動や自然体験活動等のボランティア活動を行っている。一方、島根大学教育学部は、2004年度から「多様な体験活動を通じてこそ、高度な教育実践力を培える」として、「1000時間体験学修」プログラムを必修として導入した。子ども向けの体験活動の企画・運営を通してリーダーシップを身につける活動など、体験活動を1年次から積み重ね、事後指導を通して振り返りを行うとともに、自己評価を行っている。

先に「地域の教育的役割の重要性」に言及したが、子どもたちにとって、地域生活は社会の縮図である。より大きな社会に参加するための準備段階であり、社会のルールや他者への思いやり等を学ぶ場でもある。「地域の大学」を標榜する本学にあって、教職を目指す学生を「地域における子どもたちの体験活動」に関わらせることは、「学校インターンシップ」等の学校体験活動と同様、教員養成の一環として意義あるものとする。

(2) 取組の経緯(「総合演習」から「地域貢献活動」へ)

本学が所在する薩摩川内市では、水引小学校⁽¹¹⁾の児童が2005年度から「水引キッズ応援隊」として活動している。本県「郷中教育」⁽¹²⁾の伝統を継承する「かごしま地域塾」⁽¹³⁾の一つであり、子どもたちの夏休みの生活を有意義ものと

するため、水引小学校の3年生以上の児童を対象に、異年齢集団による「寺子屋事業」を展開している。小学校及び隣接のコミュニティセンターを主な活動場所として、社会体験・自然体験等の直接体験や世代間交流による人と人との絆の大切さを学ぶプログラムを作成し、地区内の中・高校生やボランティア会員の協力を得ながら地域ぐるみで子どもたちを育成しようとする活動である。水引を離れた子どもたちがやがて親になり「子育てをするなら水引で」と、再び帰ってきてほしいという願いがある。

筆者は、本学に赴任した2008年度に、4年生の教職に関する科目「総合演習」のテーマの一つに「地域社会と子ども」（中高の英語・家庭科教諭、栄養教諭、養護教諭志望者対象）を掲げて、「水引キッズ応援隊」の活動を企画立案させた。ねらいは、教職を目指す学生に、学校現場で子どもたちの個性や能力を伸ばす実践力として生きて働く力を培うとともに、地域が子どもの人間形成に果たす役割について認識を深めさせることにあった。関係者からは、学生の柔軟な発想と学科の専門性を生かした活動計画が評価される一方、1年生あるいは2・3年生の時期から参加させることで、体験を積み重ねていってほしいとの要望があった。また、「総合演習」は前期開講科目のため、夏休み期間中の子どもたちの体験活動に参加することについては、就職活動も加わり困難なこと、さらに2013年度から「総合演習」に代わって「教職実践演習」が始まることもあって、2011年度に新たな科目「地域貢献活動」の1テーマとして「地域教育活動」を設定し、教員養成センターの事業の一つとして取り組むこととした。

「地域教育活動」は、企画立案、夏休みの実際の活動、総括としての冊子作りを行う通年の授業とした。全学科・全学年を対象としたことから、活動時間を時間割に特設せず、班別の活動を中心とし、必要に応じて6限目（18：00～19：00）を利用して指導助言等を行った。

これまでの取組を以下の3期に分け、本稿では、5年間（2011年度～2015年度）の「地域教育活動」について論述する。なお、「地域教育活動」のねらいや到達目標は「総合演習」（「地域社会と子ども」）に準じて設定した。

- 2008 年度～ 2010 年度「総合演習」（地域社会と子ども）のみ
- 2011 年度～ 2012 年度「総合演習」と「地域貢献活動」（地域教育活動）
- 2013 年度～ 2015 年度「地域貢献活動」のみ

2「地域教育活動」について

(1) 実施要領

- 科目名（テーマ名）：「地域貢献活動Ⅰ、Ⅱ」（地域教育活動Ⅰ、Ⅱ）
- 期別：通年 ○ 単位数：2
- 対象：Ⅰは、全学科1年生以上。Ⅱは、全学科2年生以上（Ⅰの単位取得者）
- 本テーマのねらい

小学生の夏期休業中の体験活動を企画立案させ、実際の活動に携わらせることで、

- A 実践的指導力を有する教師としての資質能力を育成する。
- B 地域の教育力の重要性や体験活動の必要性について理解を深めさせる。
- C 本学と地域の連携を深め、地域の教育力の向上に資する。

○ 到達目標

- a 子どもへの理解を深め、子どもが生き生きと活動する場面を設定できる。
- b チームワークのもと、各学科の特色を生かした企画立案、活動ができる。
- c コミュニケーション能力等を発揮して、保護者や関係機関と連絡調整ができる。
- d 学校・家庭・地域の役割や連携の在り方について、理解を深めることができる。

※ Ⅱの履修者には、上記到達目標の深化と、班別活動等におけるリーダーシップの発揮を求める。

○ 授業計画

- 4 月 オリエンテーション（履修登録、班分け、役割分担等）
- 5 月 かごしま地域塾等の理解（担当教員、「水引キッズ応援隊」代表者から）
- 6 月～7 月 水引小学校訪問、企画立案（班別活動）、指導計画完成（7月下旬）

8月 活動参加（午前と午後の各3時間を1コマとして4コマ以上の参加義務、他班のコマへの参加及び主催者企画への参加も必要）

10月～2月 総括のための活動（冊子作成）

○ 評価

・ 事前事後指導でのワークシート及び履修状況、活動状況報告（日誌）、レポート等

(2) 活動の実際（2015年度）

① 班別活動（履修者34人）

学科・学年の枠を越えて5つの班を編制（異年齢集団による活動）

「地域教育活動Ⅰ」(29人)【ことばと文化学科4年(1人)、こども学科1年(18人)、看護学科2年(4人)、健康栄養学科3年(3人)・1年(3人)】

「地域教育活動Ⅱ」(5人)【ことばと文化学科4年(1人)・3年(2人)、こども学科2年(2人)】

② 水引小学校訪問

○ 期日 2015年6月2日（火）

○ 日程

9:30 【大学発】 10:00～10:30 【校長から学校概況説明】

10:45～【1・2年生と交流活動(体育館)】 11:35～【授業参観(1～6年生)】

12:20 【給食(各学級に入って)】 14:00 【大学着】

○ 参加者 34人（履修者全員）

企画立案に先だって、水引小学校の状況や子どもたちの学校生活について理解を深めるため、大学の振替休日を利用して学校を訪問した。校長から学校概況の説明を受けた後、1・2年生と交流活動を行った。各班がゲームを企画し、分かりやすい説明の仕方、言葉遣いや声の大きさ、子どもたちの動きなど、事前に留意点を確認して臨んだ。寺子屋事業の企画立案の練習でもある。各学年の授業を参観した後、各学級に入って子どもたちと給食を一緒に摂った。学生には、教師の視点で観察するよう求めた。発達段階に応じ

た各学年の授業や電子黒板等の教育媒体を使った工夫に感銘を受けていた。給食の時間は子どもたちと積極的にコミュニケーションを図った。あいさつやお礼状の書き方も併せて指導した。



③ 寺子屋事業

a 企画立案の観点

- ア 調査・研究（問題を発見し、探求し解決する力を身につけさせる）
- イ 製作（自分で作る喜びを体験させる）
- ウ 鑑賞・表現（豊かな情操を育み、言葉や文字に表現する能力を育成する）
- エ ボランティア（自然や人々との関わりを通して、環境を大切にすることや奉仕の精神を培い、主体的に取り組む態度を育成する）
- オ 食育（人間が生きていく上で基盤となる「食」の大切さを実感させる）
- カ 看護（危険予知や応急処置等、実際の場面で適切な対応ができるよう、応用能力を身につけさせる）

b 全体計画（表 1）

- 看子班「体を使って思いっきり遊ぼう」（ア、イ、ウ、カ）
- えりーん班「空気法で空気の力を感じよう」「夏の思い出を写真立てに残そう」（イ）
- ペコちゃん班「万華鏡をつくろう」「からだを動かそう」（イ、ウ）
- けんえい班「野菜スタンプを楽しもう」「そうめん流しを楽しもう」（イ、オ）
- S S 班「Let's try skit!!!」（イ、ウ）

表 1. 2015 年度寺子屋事業計画表（網掛けが学生の企画立案、他班の学生も参加）

月	日	曜	自班・他班	活動場所	9:00～	10:00～		活動場所	自班・他班	13:00～	14:00～	15:00～
8	3	月				出校日		学校		開講式	KYT他	
4	火		僅水	学校	学習	防災訓練		学校		防災訓練		
5	水		中山道・塚本・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	校庭・家庭科室	学習	体を使って思いっきり遊ぼう（香子）	体育館	中山道・塚本・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	廊下	体を使って思いっきり遊ぼう（香子）		
7	金		小久保・生島・山之内・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	清水・松ケ野・高瀬	学習	夏の思い出を写真立てで残そう（えりーん）	体育館	中山道・塚本・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	大迫・内田・中山道・塚本・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	空気を空気の力を感知しよう（えりーん）		
10	月											
盆休み												
17	月		松ケ野・生島・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	小久保	コミ2階	学習	万華鏡をつくろう（ベコちゃん）	体育館	松ケ野・生島・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	谷園	からだを動かそう（ベコちゃん）	
19	水		上山・嶋山・吉村・下郷・生島・谷園		コミ2階	学習	野菜スタンプを楽しくしよう（けんえい）	体育館	上山・嶋山・吉村・下郷・生島・谷園	生島	野菜スタンプを楽しくしよう（けんえい）	
21	金			学校	出校日			コミ2階				
24	月		上山・嶋山・吉村・下郷・生島・谷園	家庭科室	学習	そうめん流しを楽しくしよう（けんえい）	家庭科室・校庭	上山・嶋山・吉村・下郷・生島・谷園		そうめん流しを楽しくしよう（けんえい）		
26	水		中山道・塚本・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	体育館	学習	Let's try skit!!(SS)	体育館	中山道・塚本・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園		Let's try skit!!(SS)		
28	金		中山道・塚本・大迫・内田・松山・吉村・下郷・生島・谷園	体育館	学習	Let's try skit!!(SS)	コミ和			閉講式		

・活動場所 コミ(コミュニティセンター) 学校(体育館・校庭) 他(その他の活動内容に合わせて)

c 活動の実際（例 指導計画「夏の思い出を写真立てで残そう」）

目 的

手作りの写真立てを作ることによって、水引キッズにおける活動をより鮮明な思い出として残す。併せて、製作を通して独創性を生かし一つのものを作り上げる喜びを味わわせる。

日時・場所 8月7日（金）10:00～12:00 コミュニティセンター

メンバー えりーん班6人、他班10人 参加者数 子ども17人

内 容

時間	子どもの活動	学生の活動
10:00	○学習道具の片づけ ・活動隊形に移動する。	・学習道具片づけの促し・活動準備をする。 ・机の配置をする。
10:10	○写真立ての作り方の説明 ・説明を聞く。	・作り方の説明をする。 ・静かに聞くよう促す。
10:20	○製作開始	

	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ずつ材料を受け取る。 ・基本材料の中身が揃っているか確認をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・材料を配る。 ・基本材料が揃っているか全員で確認をする。
10:30	○写真立ての土台製作	・カッター、はさみに注意しながら一緒に製作する。
10:55	○飾りつけ ・自由に飾りつけをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・粘土の管理に注意する。 ・デザインに困っている子どもへのサポートをする。
11:45	○製作終了・片付け	<ul style="list-style-type: none"> ・完成した作品の回収をする。 ・一緒に清掃をする。
11:55	○活動のまとめ	・活動のまとめをする。

d 評価

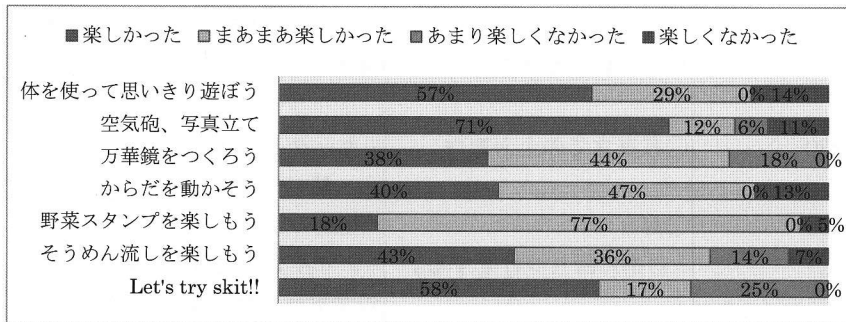
ア 子どもたちの感想から

図1で分かるように、子どもたちは各活動に必ずしも積極的に参加しているのではない。保護者に勧められてしぶしぶ参加する子どももいる。学習活動を前提とした学校と違って、子どもたちの活動に臨む姿勢は多様である。



体を使うレクリエーションは肯定的な回答が多いが、「写真立て」「空気砲づくり」「万華鏡づくり」など、創意工夫が必要な作業を伴うものは、否定的な回答が目立つ。英語劇を作り上げる「スキット」は肯定的な回答が75%に過ぎない。学生は、いかに子どもたちの興味・関心をかき立てるか、困難をどう乗り越えさせるかに意を注いだ。「野菜スタンプづくり」で「まあまあ」の割合が多いが、肯定的回答が95%に上るのは、普段は捨ててしまう野菜の「へた」などを利用しながら、切り方次第で切り口が様々な形になることなど、実際の作業を通して、子どもたちの関心をひきつける工夫をしたからである。子どもたちは、完成に近づくと自然に興が乗ってくる。

図 1. 各活動に対する子どもたちの感想（参加者 12 人～ 17 人）



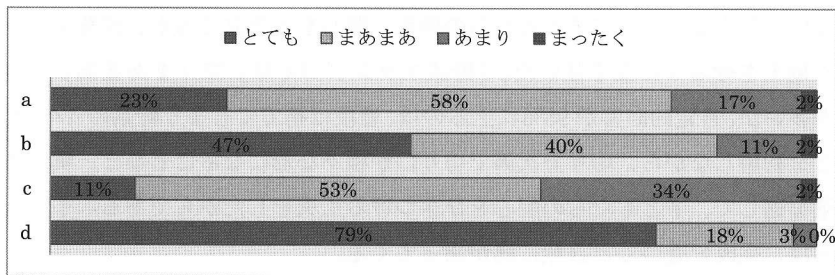
イ 学生の自己評価

「地域教育活動」のねらい及び到達目標は「(1) 実施要領」に示した通りであるが、到達目標を再掲する。

- a 子どもへの理解を深め、子どもが生き生きと活動する場面を設定できる。
- b チームワークのもと、各学科の特色を生かした企画立案、活動ができる。
- c コミュニケーション能力等を発揮して、保護者や関係機関と連絡調整ができる。
- d 学校・家庭・地域の役割について、理解を深めることができる。

到達目標 a～d について、自分の班で「できたと思うか」のアンケートをとった。選択肢は「とても思う、まあまあ思う、あまり思わない、まったく思わない」である。結果を、学生 34 人の自己評価（匿名）として図 2 に示す。

図 2. 到達目標に対する学生の自己評価（自班の活動について）



aについては「とても」と「まあまあ」の肯定的回答が81%、しかし「まあまあ」が58%に上り、否定的回答も19%である。bについては肯定的回答が87%、しかし「とても」と「まあまあ」が相半ばし、否定的回答も13%である。cについては、肯定的回答が64%と低い割合で、否定的回答も36%と高い。逆にdは肯定的回答が97%と高い割合で、「とても」も79%に上る。

a・cのように、子どもや保護者・関係機関等と関わりながら結果が求められるものについては力不足、非力さを感じているようだ。また、bのように自分たちの裁量で行うものについては比較的高い数値を示すが、肯定的回答の内訳をみると決して満足できる状況にはない。一方、dのような「知識」としての理解が求められるものについては、直接体験を通して深めていったと推察できる。これらa～dについては、毎年同じ傾向であり、とりわけcの低さについては、公的場面(社会)におけるコミュニケーション能力の育成が求められる。

なおaについて、肯定的回答81%の内訳で「まあまあ」が高く、かつ否定的回答が19%に上ることから、「子どもへの理解を深め」が「子どもが生き生きと活動する場面を設定できる」に必ずしも結びついていないことがうかがえる。またbについても、同様に「チームワーク」が「企画立案、活動」に結びついていないと考えられる。

④ 冊子作成

「地域教育活動」の取組は、冊子作成で完結する。10月から2月まで、各班の班長を企画委員として、適宜、企画委員会を実施し、編集の方向や作業の段取り等を検討し、各班で具体的な作業を進める。全体会ではプロジェクターを使って、全員で校正作業を行う。適切な文言の使い方や分かりやすい文の綴り方、構成の仕方等を具体的な作業を通して学ぶ。最後に製本作業である。

手作りの冊子としてまとめる作業を通して、学級運営はもとより、特別活動や総合的な学習の時間等を指導できる具体的な力量を育成するとともに、学校現場において子どもに達成感を味わわせることの大切さを実感させている。

冊子『地域教育活動 2015「水引キッズ応援隊」の活動を通して』の目次は以下のとおりである。

はじめに（3年生） I 水引キッズ応援隊 II 水引小学校訪問
 III 地域教育活動（平成27年度寺子屋事業、子どもの感想、学生による自己評価）
 IV 指導者の言葉（水引キッズ応援隊代表、水引小学校校長、担当教員）
 V 写真集 おわりに（2年生） 資料

3 5年間の総括

(1) これまでの企画立案（学科の特色を生かして）

○ 2011 年度

- ・高齢者体験 ・昔と今のお菓子作り ・英語で遊ぼう（スキット作り）
- ・昔遊び（缶けり、お手玉） ・廃油せっけん作り ・巨大ペイント

○ 2012 年度

- ・食事のマナー ・草木染めをしよう ・夏休みの生活リズムと食事
- ・郷土料理を作ろう ・パネルシアター ・夏の探検隊 ・鹿児島純心女子大学探検隊⁽¹⁴⁾ ・身体と頭を使った遊び

○ 2013 年度

- ・夏の探検隊(唐浜キャンプ研修視察) ・科学で遊ぼう(ペーパーブーメラン、空気砲)
- ・巨大紙芝居作り ・染め師になろう(たまねぎ、紅茶染め)
- ・身体を動かそう ・看護体験をしよう ・身近にある物で何が作れる？

○ 2014 年度

- ・キャンドルを作ろう ・水引フォーチュンクッキーにトライ ・鹿児島純心女子大学探検隊
- ・鹿児島純心女子大学探検隊まとめ ・ペットボトルロケットを作ろう

○ 2015 年度

- ・体を使って思いっきり遊ぼう ・空気法で空気の力を感じよう
- ・夏の思い出を写真立てに残そう ・万華鏡をつくろう ・からだを動かそう
- ・野菜スタンプを楽しもう ・そうめん流しを楽しもう ・Let's try skit!!

(2) 5年間の活動分析（「子ども理解」と「活動の在り方」から）

図2で、学生に自班の活動について自己評価を求めた。それによると、自分たちの裁量で実施し評価する項目や、知識としての理解が求められる項目については、比較的高く評価していたが、子どもや保護者・関係機関等、他と関わりながら、かつ結果が求められる項目については、評価が低かった。筆者は「子どもへの理解」や「チームワーク」が必ずしも結果に結びついていないのではないかと分析した。

他班の活動や、他班の活動への参加を含めた「地域教育活動」の取組全体について、学生の自己評価はどうだろうか。「c コミュニケーション能力等を発揮」については、自班の活動でさえ力不足を認識していた。取組全体では、さらに低い評価が出ることが容易に推察できる。「d 学校・家庭・地域の役割について、理解を深める」は、取組全体においても、単に知識としての理解にとどまらず、直接体験を通して実感を伴って理解を深めていったと考える。

そこで、到達目標「a 子どもへの理解を深め、子どもが生き生きと活動する場面を設定できる」と「b チームワークのもと、各学科の特色を生かした企画立案、活動ができる」の2点について下記の7項目を設定して、それぞれ「どう思うか」のアンケートをとった。aについては「子どもとのかかわり方」に注目して、「子ども理解」の観点から①～④の項目を設定した。なお④については、「感動が心を成長させる」ことから「子どもの心を揺り動かすことができたか」という問でもある。bについては「学科や学年の枠を超えたチームワーク」に注目して、「活動の在り方」の観点から⑤～⑦の項目を設定した。

地域教育活動全体としての取組（他班の活動も含む）に対する自己評価（匿名）であり、選択肢は「とても思う、まあまあ思う、あまり思わない、まったく思わない」である。その中から肯定的回答（とても思う、まあまあ思う）の割合を、5年間の自己評価の推移として、図3、図4に、それぞれグラフで示した。表中の数字の単位は%、履修者数の（ ）は総合演習の履修者数で外数、「地域教育活動Ⅱ」（前年度「地域教育活動Ⅰ」履修者）の履修者数は内数である。

なお、2011年度と2012年度は、「総合演習」の4年生と「地域教育活動」

の学生が一緒に取り組んだ。2013年度から科目としての「総合演習」がなくなり、「地域教育活動」のみで取り組んだ。

- | | |
|-------------------|-----------------------|
| ① 子どもへの働き掛けはできたか。 | ② 子ども心の様子が見えたか。 |
| ③ 子どもへの共感力は向上したか。 | ④ 子どもはあなたとの関わりで成長したか。 |
| ⑤ 企画力・運営力を発揮できたか。 | ⑥ 学生同士の仲間意識は高まったか。 |
| ⑦ 来年もこの活動を続けたいか。 | |

なお、質問項目として「直接体験の必要性を理解したか」「地域の教育力の重要性について理解したか」「活動に参加してよかったか」「教職に有意義だったか」も掲げたが、例年、肯定的回答がいずれも 100% のため、グラフから割愛した。

図 3. 「子ども理解」に対する自己評価（肯定的評価）の推移

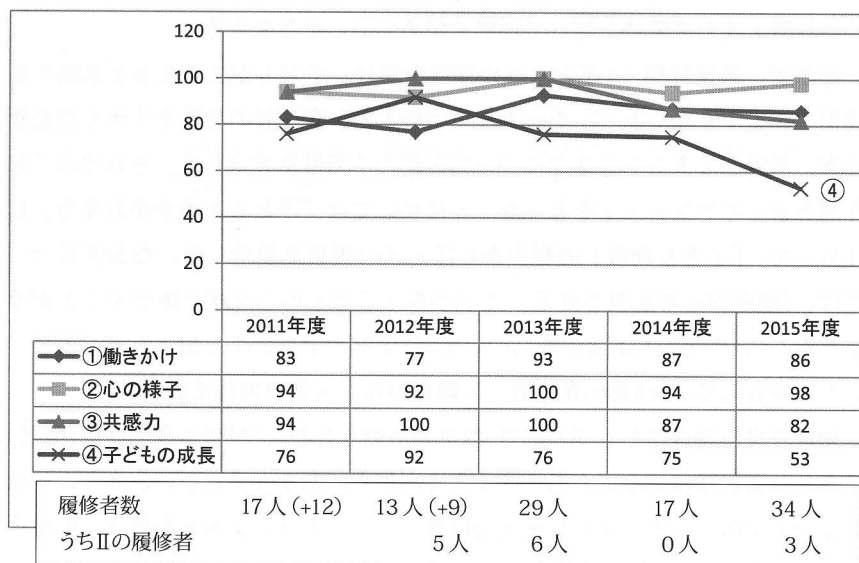
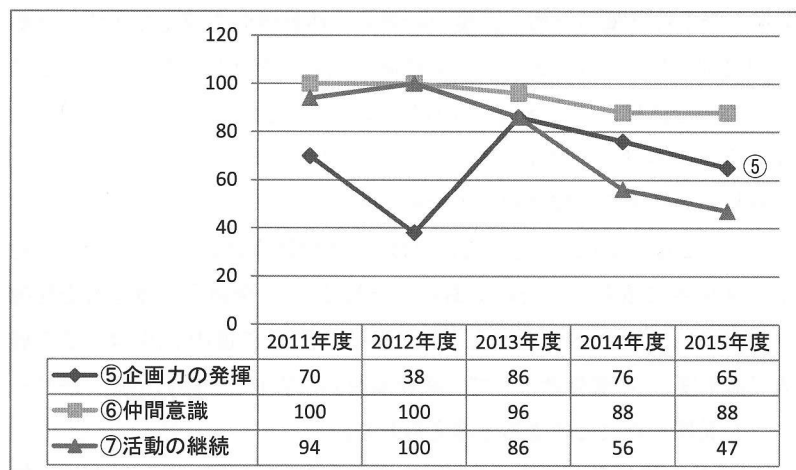


図 4. 「活動の在り方」に対する自己評価（肯定的評価）の推移



○ 自分の裁量に依拠する項目は高い評価、結果を求められる項目は低い評価

①・②・③・⑥は、回答の基準を自分の裁量で決める問いであり、各自の主観に依拠する。一方、④・⑤は、結果として表れた事実に対する自己評価であり、学生は事実に向き合い、その結果を認めざるを得ない。したがってグラフに見るように、①・②・③・⑥は、例年高い割合で推移するが、④・⑤は低い割合である。5年間の平均では、④が74.4%、⑤は67.0%に過ぎない。「子ども理解」が子どもの心を揺り動かす「⑤ 企画力・運営力」の発揮に至らなかったということであろうか。また「⑥ 仲間意識は高まったか」が5年間の平均が94.4%と高い比率にもかかわらず、「企画力・運営力」に結びついていないことも分かる。

○ 厳しい活動条件

⑦「来年もこの活動を続けたいか」については、「総合演習」の4年生がリーダーシップを発揮した2011・2012年度は高い割合である。しかし、実際にⅡを履修する学生は数人であり、履修しない理由に「他の活動にも参加したい」を挙げる学生が多かった。「地域教育活動」単独の活動になった2013年度以降は86%、56%、47%と減少し、Ⅱの履修者もわずかである。理由として、4年

生がいなくなったことに加えて、以下に示す活動条件の厳しさが挙げられる。

- ・全学年、全学科対象のため、正規の時間割に活動時間を設定できず、活動の多くが班別活動であり、班内で活動時間を融通しなければならない。連絡調整のための全体集合は、18時～19時にならざるを得ない。

- ・教職を希望する学生の時間割やスケジュールは過密である。（複数免許、看護師資格、管理栄養士資格取得のための実習等）

①について、2011・2012年度が低いのは、「地域教育活動」の学生が、「総合演習」の4年生に依存したためであり、それは「⑤ 企画力・運営力を発揮できたか」の70%・38%の低さにも表れている。2013年度の93%は、Ⅱの履修者6人（前年度、Ⅰの履修者として「総合演習」の学生と一緒に活動）がリーダーシップを発揮したことによると考えられる。

2014年度はⅡの履修者が0人、Ⅰの履修者数も17人と少なかったため、同一学科・同一学年の班編制となった。自己評価は全部の項目が前年度を下回った。学生から「他の班（他学科・他学年）とのチームワークがうまくとれず、活動が自分の班に閉じた活動となった」「子どもたちが異年齢集団であれば自分たちも異年齢集団で活動すべき」との声が上がった。

2015年度は、全学科・全学年から34人が集まった。Ⅱの履修者として3人が残り、前年度の反省を踏まえて学科・学年を超えた5つの班をつくった。チームワークやコミュニケーションを班内に止めず、他学科・他学年からの学びを期待した。肯定的回答が前年度を上回るか、前年度並みは「② 子どもの心の様子が見えたか」と「⑥ 学生同士の仲間意識は高まったか」であった。

(3) 成果と課題

「地域教育活動」の取組のねらいを、「地域の教育力の重要性」と「体験活動の必要性」を認識させながら、教師としての「実践的指導力」を育成するとともに、地域の教育力の向上に資することとした。実現のために設定した4つの到達目標については、先に2015年度の取組における自己評価を掲げて分析した。また、過去5年間の取組について、「子ども理解」と「活動の在り方」の

観点から自己評価を分析した。学生は、自分たちの裁量に依拠する項目や知識としての理解を求める項目については、高い肯定感を示すが、子どもや保護者・関係機関等と関わりながら結果が求められる項目については力不足、非力さを感じていた。また、厳しい活動条件の下、主体的活動を維持することの困難さが浮き彫りにされた。それらをもとに、成果と課題を確認する。

① 成果

a 「地域の教育力の重要性」や「体験活動の必要性」について理解を深めた。

この項目については、例年、ほぼ100%が肯定的回答をしている。学生は程度の差こそあれ、実践を通して理解を深めたと考える。

b 実践的指導力を有する教師としての資質能力の育成に努めた。

大学の教職課程が担う「実践的指導力の育成に資する」役割を果たすためには、大学での学びを学校現場で生きて働く力にしなければならない。学生は「地域教育活動」という実践場面で、直接体験を通して、試行錯誤を繰り返しながら、教員として不易とされる資質能力を育むことに努めた。

ア 実践を通した学びの獲得～失敗しながら学ぶ～

「地域教育活動」の柱は実践である。学校教育が「何ができるようになるか」を目指して、「生きて働く知識・技能の習得」や「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」を図るのであれば、指導者としての教員を養成する大学においても、その視点が必要である。最近の新採は元気がないとか失敗を怖がっているとかいう声を聞く。筆者も教育行政に携わる中で、学校の保守性や前例主義への批判を耳にした。中教審答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(H27.12.21)は「変化の激しい社会を生き抜いていける人材を育成していくためには、教員自身が時代や社会、環境の変化を的確につかみ取り、その時々状況に応じた適切な学びを提供していくことが求められる」として、「教員は、常に探求心や学び続ける意識を持つこと」が必要であり、「情報を適切に収集し、選択し、活用する能力や知識を有機的に結びつけ構造化する力を身に付けることが求められる」(9頁)とした。

「地域教育活動」では「失敗しながら学ぶ」を基本姿勢とした。学生には、「子

どもの生命と安全を守る」を前提に、そして「準備は悲観的に」を合言葉に、「後は思い切って失敗しなさい、失敗から学びなさい」を求めた。本学教員にはもとより、地域の保護者等の関係者にも、その旨を伝えて理解を得た。学内外を問わず、関係者との交渉の一切を学生が行った。筆者の役割は、方向を間違わないためのフォローである。何度試みても固まらない廃油石鹼、空気より重いドライアイスを使った空気砲等、学生は、毎年、多くの失敗を重ねた。

実際の活動場面でも、筆者は黒子に徹した。夏休みの活動は、子どもたちにとって「遊び」である。「学び」を目的にした学校と意識が違う。したがって、子どもたちからは「オモシロイ」「オモシロクナイ」など、常に本音が出る。そんな子どもたちに、学生は寄り添い、子どもたちの興味関心をかき立てるために臨機応変の対応を取らなければならない。取らざるを得ない状況に学生は置かれたのである。

イ チームとしての活動の難しさを認識～学科・学年を超えた班活動～

子どもたちに「望ましい集団活動」を求めるためには、学生たち自身が「望ましい集団活動」を行わなければならない。「(2) 5年間の活動分析」で述べたように、学科・学年を越えたチームワークづくりは、厳しい活動条件の下では困難だった。例え、自分の班の企画立案・活動がうまくいったとしても、他の班の活動への参加となると、時として事情がよく分からないままの参加になりがちであった。

到達目標の「a チームワーク」においても、結果が形として表れることから、学生は自らの非力さについて、有無を言わせぬ現実を突きつけられた。しかし、困難や失敗から多くを学んだ。活動の総括として作成している冊子の「おわりに」から引用する。「地域教育活動は決して楽な活動ではなかった。しかし、どんなに疲れていても水引キッズの子どもたちと一緒に活動すると満足感や充実感が湧いてきた。子どもたち一人ひとりが見せる反応が、私たちの心を揺り動かした。そして、まだまだ頑張れるという気持ちになった。この思いが、教師が教師を続ける理由の一つなのではないかと思った。同時に、教師になりたいという気持ちが強くなった」(2014年度)。2015年度は、チームワークをと

ることの難しさに続けて「しかし、そのような環境の中であったからこそ得られることも多かった。例えば、教師は多忙の中で毎日仕事をしているが、そこには仕事に優先順位をつける、あるいは公と私の区別の仕方など様々な配慮が必要である。(中略) 座学では得られることのない経験をこの地域教育活動は私たち学生に与えてくれた」と述べている。

c 地域の教育活動への貢献

本学の「水引キッズ応援隊」への関わりは、2008 年度から現在の「地域教育活動」まで 8 年間続いている。「薩摩川内市教育振興基本計画（平成 27 年度～平成 31 年度）」（薩摩川内市教育委員会 H27.5）は、項目に「鹿児島純心女子大学との連携・協力」（28 頁）を設定し、「鹿児島純心女子大学と薩摩川内市教育委員会は（中略）、教育活動の充実及び人材の育成に寄与することを目的として、2011 年度から『学校インターンシップ』、『教職フィールドワーク』を実施したり、地域教育活動として『水引キッズ応援隊』に取り組んでいます」と記述し、「積極的に連携を進めていきます」と結んでいる。

また、学生の企画立案、そして活動参加については、水引小学校からも全面的な協力を得ており、事前の学校訪問をはじめきめ細かな配慮をいただいている。マスコミをはじめ、様々な機関からも関心を寄せられ、学生が県主催のパネルディスカッションに招かれて活動報告を行ったり、筆者もまた学会等で発表したりしてきた。以下に、その主なものを示す。

- 県広報誌『グラフ かごしま』（2011.11 月号）掲載

特集 地域による人づくり「かごしま地域塾」

（「水引キッズ応援隊 大学との連携による地域塾活動」8 頁）

- 地元テレビ局取材・放映「郷土料理をつくろう」（2011.8.17）
- 全国藩校サミット実行委員会との交流会（2012.8.10 本学）
- 生涯学習リーダー養成研修会（県教委主催 2014.1.18）への学生参加
「地域ぐるみの家庭教育支援」のパネリスト（市教委係長、地区公民館長、小学校 P T A 会長、幼稚園 P T A 連合会長、本学 3 年生）
- 地元新聞掲載「純心女子大生、児童とゲーム」（2014.6.14）

○ 学会等発表

・「平成 23 年度 かごしま地域塾グレードアップセミナー」(2011.11.25 鹿児島県青少年会館)

事例発表「実践的指導力養成のため－水引キッズの活動を通して－」

・「九州教育経営学会第 92 回定例研究会」(2015.6.27 九州大学)

研究発表「教員養成における実践的指導力育成の一方策－小学生の体験活動を企画立案する取り組み－」

・「九州地区私立大学事務連絡協議会」(2015.12.3 鹿児島市内ホテル)

講演「地域に必要とされる大学とは－教員養成における地域連携－」

② 課題

a コミュニケーション能力の獲得

図 2 において、到達目標のうち肯定的回答の割合が最も低かったのは「コミュニケーション能力等を発揮して、保護者や関係機関との連絡調整ができる」(64%)であった。学生間のコミュニケーションにおいても、学科や学年を越えてのそれは必ずしも十分ではない。まして、関係機関や保護者等との連絡調整を含めて公的な場面でのそれは、常に課題であった。

日本経団連が毎年発表する「新卒採用に関するアンケート結果」では、企業が採用選考時に重視する要素の第 1 位が、10 年以上「コミュニケーション能力」である。これからの学校に地域社会との連携・協働が求められていることを考え合わせると、公的場面における言語表現力の育成⁽¹⁵⁾が必要であり、授業を中心とする学校の教育活動全体で、日常的に、そして体験的に醸成されなければならない。そのため、以下の指導に努める。

ア 対角線の張り方を意識させ、報告・連絡・相談の徹底を図る。

・しかるべき関係者にしかるべき報告・連絡・相談ときめ細かなタイムスケジュールの作成

・企画立案において、留意事項を相互確認する習慣づくり

イ 公的場面における言語表現力の習得を図る。

・授業における発表等、アクティブ・ラーニングの推進

- ・電話のかけ方やお礼状の書き方等についての指導
- ・冊子作成において、適切な言葉の使い方や文章の綴り方の指導

b 結果を出せる「子ども理解」や「チームワーク」

到達目標「a 子どもへの理解を深め、子どもが生き生きと活動する場面を設定できる」の肯定的回答の割合は81%であった。しかし、内訳は「まあまあ」が58%に上った。また図3、図4では、「④ 子どもは成長したか」「⑤ 企画力・運営力を発揮できたか」が、5年間を通して低い割合で推移した。「子どもへの理解を深め」、子どもの心を揺り動かすような「子どもが生き生きと活動する場面を設定できる」までに「企画力・運営力」が発揮されていない。

同様に、図2の「b チームワークのもと、各学科の特色を生かした企画立案、活動ができる」についても、「まあまあ」の40%、さらに図4の「⑤ 企画力・運営力を発揮できたか」の低い割合から、例え「⑥ 学生同士の仲間意識は高まったか」が高い割合であったとしても、それが結果に結びついていないと考えられる。結果を出せる「子ども理解」や「チームワーク」が、大きな課題である。そのため、以下の指導に努める。

ア 組織の機能化を図る。

- ・全体のリーダー、サブリーダー、班長、副班長の連絡体制の充実
- ・一人一役以上の役割分担と責任体制の明確化

イ 学生の求めに応じて担当教員がチームづくりに積極的に関与する。

- ・学生自身による問題解決への支援
- ・担当教員への相談体制づくり
- ・チームで生じる様々な問題への対応について、担当教員による実践的指導

ウ 省察の機会を確保する。

- ・実践と省察の常態化を図り、学びの経験を重ねさせる工夫
- ・個人、グループの省察に大学教員が積極的に関与

おわりに

教育再生実行会議第8次提言（H27.7.8）は、「学校は、人と人をつなぎ、様々な課題へ対応し、地方創生の核となる地域コミュニティの中心としての役割を果たしている」として、「コミュニティ・スクールを核とした地域とともにある学校づくりの推進」を提言した。中教審答申「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方について」（H27.12.21）は、「学校における地域との連携・協働体制を組織的・継続的に確立する観点から、コミュニティ・スクールを一層推進」し、「すべての公立学校においてコミュニティ・スクールを目指す」としている。

筆者は、かつて鹿児島県の公立高等学校再編整備計画に携わった。子どもたちのため、教育環境を整えることを第一に考えて適正規模の学校づくりに努めた。地元関係者からは「学校がなくなれば地域が衰退する」「学校は地域の文化の中心だ」等、学校存続を望む声を多く聞いた。その後、本県では少子化が進む中、中学校、小学校まで整理統合が進みつつある。学校の存否が地域の死活問題であるとするれば、そして学校が地域づくりの一翼を担っているとするれば、「学校を核とした地域づくり」に地域を構成する全ての団体や関係者が、当事者として参画する必要がある。特に地方にあっては、核となる学校をどう活性化させていくかが、地方創生の実現へ向けた大きな鍵と考える。

学校の役割も重大である。ただでさえ多忙を極める教員や学校である。次期学習指導要領は、学習内容の削減はせず、カリキュラムマネジメントの実施を各学校に求めている。教員や学校には、相当の創意工夫が必要であろう。前掲の答申は「教職員が様々な地域活動に参加し、地域課題の解決に取り組むことを過度に求めていくことのないよう十分に留意する必要がある」（59頁）としながらも、「チーム学校の考え方の下、学校現場以外での様々な専門性を持つ地域の人々と効果的に連携しつつ、教員とこれらの者がチームを組んで組織的に諸課題に対応するとともに、保護者や地域の力を学校運営に生かしていくことが必要であること、また、新たな教育的課題に対応していくためには、学校が地域づくりの中核を担うという意識を持ち、学校教育と社会教育の連携の視

点から、学校と地域の連携・協働を円滑に行うための資質を養成していくことも重要であるとされている。」(6頁)と述べる。さらに、「一方的に、地域が学校・子供たちを応援・支援するという関係ではなく、子供の育ちを軸として、学校と地域がパートナーとして連携・協働し、互いに膝を突き合わせて意見を出し合い、学び合う中で、地域も成熟していく視点が必要である」(11頁)とも述べ、「これからの学校と地域の連携・協働の在り方」の姿として、○「地域と一体となって子供たちを育む『地域とともにある学校』への転換」、○「地域全体で学びを展開していく『子供も大人も学び合い育ち合う教育体制』の構築」、○「自立した地域社会の基盤の構築を図る『学校を核とした地域づくり』の推進」を掲げた。

「教員として最小限必要な資質能力」「職務を著しい支障を生じることなく実践できる資質能力」を育成する大学の力量も、また問われている。

註

- (1) 2010年度、本学の「地域貢献活動に挑み育つ就業力～問題解決力に富むしなやかな女性の育成～」が文部科学省G P「大学生の就業力育成支援事業」に採用された。それに伴い、翌年に基礎教育科目の人間教育科目として開講、学生はそれぞれが選択したテーマの下で活動している。
- (2) 実践的指導力が問われるようになったのは「教員の資質能力の向上方策等について」(教養審答申 S62.12.18) から。答申は「教育者としての使命感、人間の成長・発達についての深い理解、幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、教科等に関する専門的知識、広く豊かな教養、そしてこれらを基盤とした実践的指導力が必要である」としている。以後、各答申で言及され、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(中教審答申 H27.12.21) は、「養成段階は教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修を行う段階であることを認識する必要がある」とし、「実践的指導力の基礎の育成に資するとともに、教職課程の学生に自らの教員としての適性を考えさせる機会として、学校現場や教職を体験させる機会を充実させることが必要である」としている。
- (3) 「実践的指導力を有する教員を養成するため、全学の教職課程を担当し、全学に係る教職課程カリキュラムを一元的に企画・運営することにより、教員養成の充実を図ることを目的とする」(「教員養成センター規程」(目的)第2条)として設置。「学生の目に見えるセンター」として、在学生への対応をはじめ、卒業生への対応、さらに地域の大学

学としての地域貢献等を視野に置きながら活動を展開している。

- (4)「学校インターンシップ」と「教職フィールドワーク」の実施に当たって、教育委員会や学校の理解と協力が不可欠であることから、2006年度に結んだ「鹿児島純心女子大学と薩摩川内市教育委員会の連携協力に関する協定書」に基づいて2011年度に構築した。本プロジェクトの下に、大学・教育委員会・学校等の協議機関として「推進会議」及び「運営委員会」を設置して、事業の一切を協働で実施している。
- (5) 2011年度から実施。教師としての視点から教職や教育について考えさせるとともに、「教師になりたい」という夢と志をもち、意欲的に教職課程での学びに参加できるようにするため、9月に5日間、薩摩川内市内の公立幼稚園・小学校・中学校で学校体験を行う。通年1単位。
- (6) 2012年度から実施。「学校インターンシップ」を体験した学校で、翌年以降、年間を通して、大学の授業の傍ら、学校の周辺の校務に携わりながら学校教育の実際を体感させるものである。教職や校務の全体像を把握できるとともに、受け入れ校の教育活動の一助ともなっている。通年2単位。
- (7) 教育基本法第13条「学校、家庭及び地域住民等の相互の連携協力」を具体化するため、2008年から3か年、国の施策として、小・中学校区に「学校支援地域本部」を設置、学校の教育活動を支援するため、地域住民が学校支援ボランティアとして、授業補助、部活動指導の補助、環境整備等、多岐にわたる活動を行う。地域コーディネータが、学校とボランティア、あるいはボランティア間の連絡調整を行う。現在、鹿児島県では「かごしま学校応援団」という名称で活動している。
- (8) 鹿児島県教育委員会が、「開かれた学校づくり」を目指して、2003年度に毎年11月1日から7日の期間を設定。学校・家庭・地域社会のより一層の連携と協力の下に、県民一人ひとりが鹿児島の教育について考える気運を高め、教育の充実と発展を図ろうとするもの。県や市町村の行事、学校が実施する授業参観等、保護者・地域住民への学校開放に関わる行事などを可能な限りこの期間に引き寄せて実施することで、多くの県民が参加し、学校や子どもたちの様子を見て、鹿児島の教育について考えるきっかけづくりとしている。
- (9)「(3) 今後における教育の在り方の基本的方向」で、「今日、子どもたちは、直接体験が不足しているのが現状であり、子どもたちに生活体験や自然体験などの体験活動の機会を豊かにすることは極めて重要な課題となっていると言わなければならない。こうした体験活動は、学校教育においても重視していくことはもちろんであるが、家庭や地域社会での活動を通じてなされることが本来自然の姿であり、かつ効果的であることから、これらの場での体験活動の機会を拡充していくことが切に望まれる」としている。

- (10)「通知」は以下のように記述する。「完全学校週5日制は、幼児、児童及び生徒の家庭や地域社会での生活時間の比重を高めて、主体的に使える時間を増やし、『ゆとり』の中で、学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、子どもたちに社会体験や自然体験などの様々な活動を経験させ、自ら学び自ら考える力や豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの『生きる力』を育むものである。各教育委員会及び学校は、この趣旨の実現に向けた取組を一層充実すること。」
- (11) 薩摩川内市の中心街から国道10号線沿いに北へ約9キロの位置にあり、本学とは約10キロ離れている。児童数約130人。2006年度から薩摩川内市が小中一貫教育特区として認定されたことに伴い、そのモデル地域として小中一貫教育の充実に努め、2014年度からはコミュニティ・スクールとしての取組を行っている。
- (12) 薩摩藩の伝統的な異年齢集団による教育。「郷中（ごじゅう）」とは、町内の区画や集落単位の自治会組織。青少年を「ちご（年少者）」と「にせ（年長者）」に分けて勉学・武芸・山坂達者（やまさかたっしゃ、今でいう体育・スポーツ）を通じて、先輩が後輩を指導することで、強い武士集団をつくろうとする組織である。明治維新の立役者となった西郷隆盛や大久保利通等、多数の人材を輩出した。
- (13) 「郷中教育」の伝統を継承し、郷土に誇りをもち心身ともにたくましい子どもの育成を目指して、地域を基本単位として組織された。異年齢の集団で、学習活動、体験活動、精神鍛錬等を行う。「郷土に学び、育む青少年運動」（「鹿児島県青少年育成県民運動推進基本方針」に基づき2006年度展開）の組織体制やNPO・企業等との連携による組織を基盤とし、地域の緑や地域社会に蓄積された様々な知恵を生かして、より地域に根ざした自立した様々な形の活動が県内の各地域で行われている。2005年・2006年に「水引キッズ応援隊」を含む12のモデル地域で実施され、2016年11月現在で、県の認証団体は36団体で、「いちき串木野市青松塾」も、その一つである。
- (14) 隔年で、水引キッズの児童が本学を訪問する。本学を地元の大学として身近に感じてほしいことが目的の一つ。学生の企画立案により、大学の各施設をゲーム仕立てで探索したり、調理室で学生の指導のもと、一緒に料理をつくり昼食を摂ったり、体育館でレクリエーションを行うなどの活動をする。2014年度は大学の菜園で学生が育てた野菜を使ったピザづくり、2016年度は菜園の野菜を収穫して手巻き寿司をつくった。
- (15) 「高校生の勉強に関する調査（報告書）」（財団法人日本青少年研究所 2010.4）は、日本の高校生は、米・中・韓国の高校生に較べて授業中積極的に発言しない、発言させる授業が好きではない、発言させる授業も少ないという調査結果を発表した（11・13・20・21頁）。筆者は、公的場面には一般性・普遍性を志向する公的内容が必要であり、公的場面としての授業において、日常的に発信力・傾聴力を身に付けさせなければなら

ないと考える。拙著「社会性を育むために一言語表現力の育成」(『キリスト教文化研究センター報告 第4号』2012)

参考文献

中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について(答申)」(H24.8.28)

中央教育審議会「第2期教育振興基本計画について(答申)」(H25.4.25)

まち・ひと・しごと創生本部「まち・ひと・しごと創生総合戦略」(閣議決定 H26.12.27)

文部科学省「教育課程企画特別部会における論点整理について(報告)」(H27.8.26)

文部科学省「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(報告)」(H28.8.26)

中央教育審議会「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について(答申)」、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について(答申)」、「これからの学校教育を担う教員の資質能力向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～(答申)」(H27.12.21)

文部科学省「次世代の学校・地域創生プラン～学校と地域の一体改革による地域創生～」(文部科学大臣決定 H28.1.25)

中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について(一次答申)」(H8.7.19)

文部科学省「小学校学習指導要領解説 特別活動編」、「中学校学習指導要領解説 特別活動編」(H20.9)

中央教育審議会「今後の青少年の体験活動について(答申)」(H25.1.21)

鹿児島県社会教育委員の会議「体験活動の推進方策と青少年社会教育施設のあり方～心豊かでたくましい子どもを育てるために～(審議のまとめ)」(H24.3)

財団法人 日本青少年研究所「高校生の勉強に関する調査(報告書)」(2010.4)

獅子目博文「社会性を育むために～言語表現力の育成～」(『キリスト教文化研究センター報告 第4号』鹿児島純心女子大学 2012.3)

獅子目博文「8章 生徒指導実践と教師の在り方」(『教育実践に役立つ生徒指導・進路指導』あいり出版 2013.3)

論文要旨

教員養成における実践的指導力育成の一方策 ～小学生の体験活動を企画立案する取組～

獅子目 博文

キーワード：地域教育活動 実践的指導力 体験活動 地域の教育力

水引キッズ応援隊

要旨

「地域教育活動」は、教職を目指す学生に小学生の夏休みの体験活動を企画立案させ、実際の活動にも参加させることで、教員としての実践的指導力の育成を図り、併せて地域住民と協力しながら、小学生に自然体験等の豊かな体験を提供することで、地域の教育力の向上に貢献しようとするものである。5年間の実践事例を紹介しながら、成果と課題を明らかにする。